

六ヶ所村表館(1)遺跡 a 地点採集の縄文早期資料など

福田友之

I. はじめに (図1)

表館(1)遺跡(県遺跡番号50019。図1-1~3)は、上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢にある縄文時代草創期・早期と平安時代を主とする遺跡である。この遺跡は、昭和47年から「むつ小川原開発事業」に伴い県教育委員会によって断続的に調査されてきており、昭和53年8~9月のむつ小川原港臨港道路建設予定地における試掘調査では、路線内外一帯の分布調査もあわせて行なわれた。その結果、a~fの遺物採集地点のうち、a地点(図1-1)からは早期中葉の物見台式土器片と石器、b



図1 遺跡の位置 (本図は国土地理院発行の5万分の1地形図「平沼」を複製したものである)

地点（図1-2）からは物見台式と前期の土器片等が採集され、a地点が物見台式期の遺跡である可能性が指摘された^{（注1）}。その後a地点は、昭和62年5～10月に同開発事業に関わる専用道路建設事業に伴い県文化課によって試掘調査が行なわれ^{（注2）}、さらに翌昭和63年5～6月には、県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行なわれた（I地区）。この結果、県内では数少ない物見台式期の竪穴住居跡を伴う遺跡であることが判明し^{（注3）}、注目されることとなった。

小稿で紹介する資料は、おもにこのa地点において筆者が表面採集した縄文早期資料である。発掘調査が行なわれた遺跡からの採集品であるため、参考資料といった意味で紹介するが、この機会に、県内他遺跡から表面採集した若干の早期土器等もあわせて紹介したい。

Ⅱ．表館（1）遺跡採集の土器（図1～3）

昭和54年から平成元年にかけてa地点から採集したものが大半で、他地点のものは非常に少ない。

（1）a地点（図2。図1-1）

口縁・胴・底部破片が多数あるが、おもに口縁部破片や大きな破片を紹介する。

1は貝殻腹縁による押し引き文が施されたものである。2～36は、貝殻腹縁文と沈線文を組み合わせた幾何学文が施されたもので、口縁部と胴部破片であり、口縁部は小波状を呈するものも多い。6～8・10・12～16・21～25・28～33には円形刺突文もみられる。また、口縁部内面に縦位の貝殻腹縁文が連続して施されたものも多い。26・29には肥厚した小円部がみられる。また、7には補修孔があげられている。37は唯一、沈線文と刺突文のみが施されたもので、径1mmほどの刺突が斜めに連続して施されている。38は表裏両面に条痕文が施されたものである。また、39は無文の口縁部破片、40・41は底部に近い無文部破片、42は乳房状を呈する尖底部破片である。

これらのうち、1は早期中葉の吹切沢式、2は早期中葉の鳥木沢式～物見台式、3～42は早期中葉の物見台式とみられる。

（2）a・b両地点間、b地点（図3。図1-2）

43・44はa・b両地点間、45・46はb地点から採集したもので、貝殻腹縁文が施されている。45は波状の口縁部破片で、貫通孔があげられている。いずれも早期中葉の物見台式とみられる。

（3）バス置き場地点（図3。図1-3）

昭和54年4～7月に当時、作業員の送迎バスを留めていた地点から採集した。48は表面に縄文、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉とみられる。また、47は半截竹管状の施文具による連続刺突文が胴部・底面に施された底部破片で、前期前葉の表館式とみられる。

Ⅲ．表館（1）遺跡採集の石器（図4・5）

昭和54～57年にa・b両地点から計22点（石匙のみがb地点）採集した。1～3は石鏃でいずれも基部に挟り込みがある。4は木葉形の両面加工の尖頭器、5は縦型の石匙で主要剥離面の片側の側縁に小剥離を施したものの、6は不定形スクレイパーである。7は磨製石斧の刃部小破片、8はすり石の破損品で、下端にすり面がある。9～11は敲き石で棒状礫や円礫に敲き痕がみられる。12～21は石錘で、大小の扁平円礫・角礫を用いており、21を除いて他はすべて縦長形の上下両辺に挟り込みがある。13・17は火熱を受け、一部変色している。22は礫器であり、両端を両面から剥離している。また、こ



図2 表館(1)遺跡a地点採集の土器

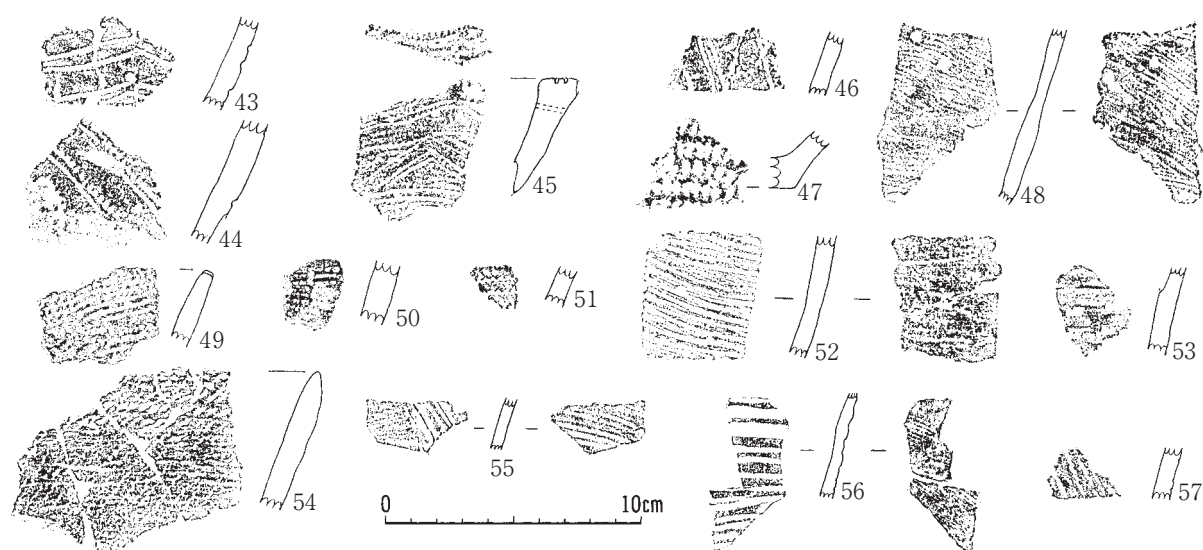


図3 表館（1）遺跡 a 地点外採集の土器

のほかに図示してはいないが珪質頁岩の剥片・チップ類もある。なお、石質は1～6はすべて珪質頁岩、7～22では、7が輝緑岩質凝灰岩、8・20が安山岩、9・12・16・18が砂岩、10・14が玄武岩、15が細礫岩、11・13・17・19が安山岩質凝灰岩、21がチャート、22が石英斑岩である。また、重さは1～3がそれぞれ0.3g、0.6g、1.8gであり、4は23.3g、5は10.9g、9は157.4g、12～22は、それぞれ74.0g、36.4g、73.1g、210.2g、450.9g、274.6g、227.3g、279.9g、92.8g、147.9g、301.5gである。

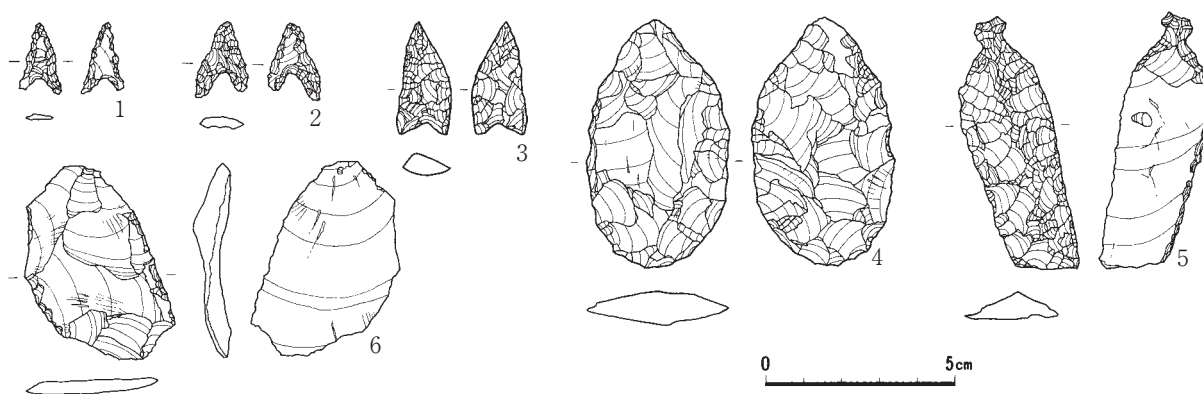


図4 表館（1）遺跡 a 地点採集の剥片石器等

IV. 他遺跡採集の土器（図3）

（1）新納屋（2）遺跡（六ヶ所村大字鷹架字道の下。県遺跡番号50109。図1～4）

昭和57年6月に採集した。49は貝殻腹縁の押し引き文が施された口縁部破片、50は胴部破片である。いずれも早期中葉の吹切沢式とみられる。ちなみに当遺跡は、昭和54年4～7月に、むつ小川原開発



図5 表館(1)遺跡a地点採集の礫石器

に関わる幹線連絡道路建設事業に伴い県文化課によって調査され、吹切沢式期の竪穴住居跡が2軒発見されている^{（注4）}。

（2）庄内（1）遺跡（六ヶ所村大字倉内字笹崎。県遺跡番号50090。図1－5）

昭和54年7月に庄内墓地遺跡^{（注5）}（現在の庄内（1）遺跡）から採集した。51は貝殻腹縁文が施されたもので、物見台式とみられる。52は表裏両面に条痕文が施されたもので、早期、53は表面に低い細隆起線文と浅い刺突、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉の早稲田第3類とみられる。

（3）米軍三沢基地内鯨森遺跡付近（図1－6）

昭和60年10月に、上記にあるゴルフ場脇の切通しから採集した。54は貝殻刺痕・腹縁文が施された口縁部破片で、早期中葉の寺の沢式とみられる。55は表面に細隆起線文、裏面に条痕文が施されたもので、早稲田第3類とみられる。また、56は表面に平行沈線文、裏面に条痕文が施されたもので、早期後葉のムシリⅠ式とみられる。

（4）寺の沢遺跡（三戸町大字川守田字寺の沢。県遺跡番号58023。図1－7）^{（注6・7）}

昭和58年8月に採集した。57は貝殻腹縁文が施されたもので、早期中葉の寺の沢式とみられる。

V. おわりに

表館（1）遺跡 a 地点採集の土器は、大半が早期中葉の物見台式に比定されるものであり、石器についても、この遺跡の調査結果^{（注3）}をみれば、ほぼ物見台式期のものと考えられる。ここに紹介した資料はいずれも表面採集品で、しかも断片的なものではあるが、この遺跡における物見台式期の文化内容を考えるうえで、多少とも参考になるところがあれば幸いである。

小稿を終えるにあたり、石質鑑定をしていただいた弘前大学理工学部の柴正敏氏、種々ご教示・ご協力いただいた三沢市教育委員会の長尾正義氏、及び当センターの齋藤正氏に対し、心から感謝申し上げる次第である。

『注』

- （1）青森県教育委員会 1979 『むつ小川原港臨港道路に係わる埋蔵文化財発掘事前調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第50集
- （2）青森県教育委員会 1989 『表館（1）遺跡試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第121集
- （3）青森県埋蔵文化財調査センター 1990 『表館（1）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
- （4）青森県教育委員会 1981 『新納屋遺跡（2）発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
- （5）青森県教育委員会 1974 『むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布・試掘調査報告書－昭和48年度』青森県埋蔵文化財調査報告書第10集
- （6）名久井文明 1972 「東北北部における縄文式早期の新型式2例 略報」『青森県立三戸高等学校研究紀要』第2集
- （7）名久井文明 1974 「北日本縄文式早期編年に関する一試考」『考古學雑誌』第60巻第3号